

インド 現地資料の収集

坂井 華奈子*

アジア経済研究所（アジ研）は、開発途上国・地域の政治、経済、社会に関する社会科学分野の基礎的総合的研究を行う研究機関である。研究活動の現地主義に対応し、アジ研図書館でも現地刊行の現地語の資料を重視し、現地に根ざした資料収集を行っている。特に、現地書店との直接取引による購入、現地研究機関や大学、政府機関等との資料交換、直接現地を訪問しての資料収集活動が特徴的である。本稿では、インドの現地資料収集について、アジ研図書館のこの特徴ある資料収集活動を基にご紹介してみたい。また、後半では2007年にデリーを訪問して資料事情に関する現地調査を行った際の体験についても触れる。

キーワード：インド、資料収集、書店、図書館、資料交換

1. はじめに

アジア経済研究所（以下、「アジ研」とする）は日本における開発途上国研究の拠点として、世界への知的貢献をなすことを目指す社会科学系の研究機関である。創設以来、「現地語」を用い、「現地資料」にあたり、「現地に滞在」して調査するという「三現主義」を掲げ、研究活動を行ってきた。当然、図書館にもそのような研究活動を支援するための資料収集が求められる。アジ研図書館では、この調査研究活動における「三現主義」に対応し、「現地刊行」の「現地語」の資料を重視し、現地に根ざした資料収集を行っている。

本稿では、インドの現地資料収集について、アジ研図書館の資料収集活動を基にご紹介してみたい。

まず、前半ではアジ研図書館の特徴ある資料収集方法についてご紹介し、後半では筆者自身の資料収集等を目的としたインド出張の体験をご報告する。なお、資料の分野によっても事情は異なると思われるが、当研究所の対象領域は主に政治、経済、社会等を中心とする社会科学分野であることをご留意いただきたい。また、筆者はインドを含む南アジア地域を担当しているが、現地事情・現地語については、2006年の入所後からOJTや研修制度を通して学んでいる最中であることをお断りしておく。特に、これまで実際にインドを訪問したのは、2007年に現地の資料事情を調査するための出張で5日間ほどデリーに滞在した1回のみである。近年のインドの発展のスピードはめまぐるしいものであるため、当時見聞きした現地事情もすでに古い内容となっているかもしれないが、実際に現地に行ってみて初めてわかったことも多く、貴重な機会であったと思う。前置きが長くなったが、これまでの経験の範囲でインドの

現地資料収集事情についてご紹介してみたい。

2. アジ研図書館の資料収集 ―現地から・現地にて

アジ研図書館は、研究所の調査研究活動等を資料・情報の面から支援するとともに、日本の開発途上国研究に関する資料センターを目指し、わが国の開発途上国研究の情報インフラとしての役割を果たすべく草創期から活動してきた。蔵書冊数は約59万冊と、専門図書館としては比較的大きな規模といえるだろうが、冊数で比較すれば歴史の古い大学図書館などには及ばない。しかし、創設時より一貫して現地資料を重視した蔵書構築を行ってきた結果、他に類をみない貴重なコレクションが形成されている。国立情報学研究所のNACSIS-ILLの貸借受付件数の統計を見ると、1,000機関を超える全参加機関中7位（1,025件、平成22年度）となっている。この数字からもその希少さがうかがい知れよう。

また、国内では容易に入手できない資料の現地からの収集や、現地資料を活用したレファレンスに対応できるように、ライブラリアンひとりひとりが担当地域を持っており、その地域に関する知識や言語の習得に努めている。そして、それらを取りまとめる各地域のコーディネーターとなる職員が配置されており、当該地域をフィールドとする研究員との窓口的な役割も果たしている。現地に密着した資料収集を効率よく行うには研究員との協力関係は欠かすことができないものである。

前述のように、現地資料を重視した収集方針を持っているため、アジ研図書館では、通常の国内代理店を通した資料購入の他に、次のような資料収集方法をとっている。

2.1 現地からの直接購入

開発途上国で出版された資料は国内大手代理店では扱っていないことが多く、通常的手段での入手が難しい。そのような場合には、ライブラリアンが直接現地の出版者や書店にEメールや手紙等を通じてPro forma invoice（見積

*さかい かなこ 日本貿易振興機構 アジア経済研究所 図書館 資料整理課
〒261-8545 千葉県千葉市美浜区若葉 3-2-2
Tel. 043-299-9712 (原稿受領 2011.11.10)

書)を請求し、購入手続きを行っている。メールや手紙、FAXを駆使してもなかなか連絡がつかず、ライブラリアン自ら国際電話をかけるほか、現地調査の際に直接訪問してもらったり、現地に派遣中の職員がいれば協力を依頼したり等、研究員の力を借りて購入手続きを行う場合もある。それぞれのライブラリアンが担当する地域を持っているとはいえ、資料収集を担当する職員が全地域の言語を習得しているわけではないことから、基本的に購入に関するやりとりは英語で行っている。しかし、雑誌等の欠号請求や配送上の問題、送金情報などでこみいったトラブルが発生した場合には、お互いに母語でない英語でのやりとりではうまくいかないことも多々あり、現地語のできる職員に協力を仰ぐことになる。筆者が以前海外からの新聞の購入を担当していた時には、先方から届いた送金先の口座情報が間違っているため送金が実行できず、何度連絡しても返答がなかったため、当時当該国(シリア)に駐在していたライブラリアンに新聞社を訪問してもらったところ、こちらから送った文書はきちんと届いており、問題は先方も把握していたが英語で返答するのが困難で保留にされていたことが判明したということもあった。また、緊急の要件で英語で電話をかけたところ、たらい回しにされた挙げ句「わからない」と切られてしまったこともあった。これは私自身の英語力の問題でもあると思うが、この時は現地語のできる上司に頼んで同じ内容をアラビア語で書いてもらいFAXで送ったところ、すぐに返答があり、「三現主義」の現地語の重要性を身をもって知った体験となった。

その点、インドは英語が準公用語であることも手伝って、比較的現地書店からのレスポンスもよく、また、他の地域に比べて出版点数も多いため、現地からの直接購入の割合も高い方である。

もちろん、こうした現地資料を収集するためには、どのような資料が現地で出版されているかを把握し、選書を行わなければならない。インドの出版者や書店はウェブサイトを持っているところも多く、オンラインで新刊や価格を確認することもできる。また、登録しておくでEメールで新刊情報を送ってくれる書店もある。カタログ情報以外に、現地の主要な雑誌に掲載されている新刊広告や書評記事から選書を行うことも多い。

2.2 寄贈・交換

販売されていない政府刊行物や統計類、研究報告書など、商業ルートでの入手が困難な資料(いわゆる灰色文献)については、寄贈や資料交換での収集が有効である。販売されているものも含め、文字通り出版物を無料で寄贈してもらう場合と、現地の主要な研究機関、大学、政府機関、図書館等にアジ研の出版物を送付して、代わりにその機関の出版物を送ってもらう場合(資料交換)がある。雑誌類を交換している場合が多いが、図書を含む全出版物を対象としている場合もある。その機関に関する情報や、お互いにどのタイトルを送りあっているか、欠号の請求や送付をいつしたかなどの情報は台帳を使って管理している。現在は

国内外合計 1,078 機関(平成 21 年度末時点)と資料の交換を行っており、そのうち、インドを含む南アジアの交換先は 114 機関と約 1 割を占めている。後述する現地調査の際にもこれらの交換機関との関係が重要となる。

最近では紙媒体での出版や配送コストの負担を抑えるため、出版部数を抑制して電子版に切り替えるなど、資料交換を難しくするような動きも見られるが、政府刊行物や研究機関のレポート類など、商業ルートに乗らない重要な資料を発行の都度継続的に収集するためには効果的な方法である。

機関からの寄贈の他に、個人の蔵書の寄贈を受け入れることもある。研究員が海外赴任する際や、退職する際に研究室においてあった個人の蔵書を整理する場合などに寄贈を持ちかけられることが多い。レアなケースであるが、最近、お亡くなりになった元職員のご遺族からの依頼で、ご自宅から資料を運び出すということも行った。故人がインド派遣中に現地古書店等を通じて収集したと思われる非常に貴重な資料が含まれていた半面、一部、屋外のプレハブに保管されていた資料については保存状態が芳しくなく、虫害のおそれがあったため受け入れ前に燻蒸を行うことになった。

2.3 現地調査

調査のための出張をアジ研では「現地調査」と呼んでいる。資料収集に関する現地調査には、ライブラリアン自らが現地に赴き関係機関や書店にて資料を収集する場合と、研究者と連携し現地調査時に資料収集を依頼する場合の 2 種類がある。予算やマンパワーの制約もあり、図書館から毎年全地域に出張に行くことができるわけではないため、研究者が調査に行く際に図書館の資料購入費を携行してもらい、現地の書店や統計局などで資料を収集してきてもらうことも多い。統計資料や年刊類の欠号など、入手してほしいものをリストアップして渡す場合と金額の範囲で自由に選書してもらう場合がある。特に、資料交換が滞っていたり、雑誌や新聞のリニューアルがうまくいっていないなど、何らかの問題がある地域については、どの研究者がいつごろ現地調査に行くかという情報を見逃さないようにしておかねばならない。

さて、はじめに触れたとおり、筆者は 2007 年にインドへ出張し、資料収集と現地資料事情の調査を行った。次節では当時の体験を基にインドに関する資料の収集について書いてみたい。

3. インドでの資料収集活動

前述の通り筆者は入所してから南アジア地域を担当することになったため、現地事情を知るための研修を兼ね、シニアの研究員の現地調査に一部同行させてもらう形で、初めてインドを訪れることとなった。インドは南アジア地域の中で非常に重要な位置を占めている。その資料事情について学ぶと共に、ライブラリアンが研究者に随行することで資料収集の上での調査・研究的観点について理解を深め

ることも目的としていた。調査期間は 2007 年 9 月 9 日から 15 日までであったが、移動日を除くと実際の活動日は 5 日間であった。訪問先は、政府関係機関等が集中しインドの出版・書籍流通の中心でもあるデリーとし、始めの 2 日間は研究員と同行して調査や資料収集を行った。

訪問先は、取引履歴がある書店、資料交換を行っている交換機関を中心に選定した次の 11 カ所である。ライブラリアンや関係者と情報交換を行うとともに、資料交換関係の確認・交換機関開拓の交渉、資料収集を行った。各訪問先についての詳細は次節以降で述べる。翻訳に自信のないところには英語表記を用いたが、聞き取りの内容等、筆者の至らない理解により誤りがある可能性がある。その点を踏まえてお読みいただければ幸いである。

【書店】

- ① Jain Book Agency
- ② Manohar Publishers and Distributors
- ③ Prabhu Book Service
- ④ UBS Publishers' Distributors

【図書館・関係機関】

- ① Central Secretariat Library
- ② Lok Sabha Secretariat Parliament Library
- ③ Library, Indian Institute of Public Administration
- ④ Ratan Tata Library, Delhi School of Economics, University of Delhi
- ⑤ Library, Jawaharlal Nehru University
- ⑥ Central Statistical Organization, Ministry of Statistics and Programme Implementation, Government of India
- ⑦ National Social Science Documentation Centre, Indian Council of Social Science Research

3.1 書店

このときの調査では、政府刊行物や法律関連資料を主に取り扱う Jain Book Agency、学術書を主に扱う Manohar Publishers and Distributors と UBS Publishers' Distributors、絶版の古書をはじめとする貴重書や一般に流通していない政府刊行物などを主に扱う Prabhu Book Service を視察し、資料収集を行った。書店により、得意とする主題分野などが異なっており、実際に現地でその違いを知ることができたのは有意義であった。

Jain Book Agency はコンノート・ブレイスと呼ばれるデリーの中心部、近代的なショッピングモールなどがあるエリアに位置していた。法律関係を中心に、有料の政府の出版物、ダイレクトリーなどの品揃えが充実していた。ここでは視察の上、カタログの入手と資料購入を行った。

Manohar および UBS の位置するアンサリ・ロード周辺は日本の神田神保町のような書店街になっており、さまざまな書店や出版社等が集中している。

Manohar は学術書の出版も行っている有数の書店であ

る。店内には新刊からやや古いものまで、学術系の資料を中心に取り揃えられていた。もちろん自由に棚で図書を手にとって見ることもできるが、資料の分野や主題を伝えると、めばしい資料を運んでくれるようであった。カタログの有無について尋ねたところ、すべてウェブサイトに掲載しているため残念ながらカタログの発行は行っていないとのことだった。インド関係の研究者はデリーに行くときこの書店を訪れることが多いらしく、知り合いの日本人研究者同士がこの店でばったり会ったというエピソードも聞いたことがある。



図 1 Manohar 店内

Prabhu Book Service は、デリーから車で 1 時間ほどのグルガオンという郊外の町に位置する専門書店である。住所をたよりに途中までは車で行くことができたが、店の入り口にたどり着くには舗装されていない路地に入っていかなければならず、入り組んだ路地の手前で車を降り、電話をして迎えにきてもらうことになった。

店主は資料事情にとっても精通しており、最近の政府刊行物等の出版事情について話を聞くことができた。店主によると、資料のウェブ公開がさかんになったため、冊子体で出版される部数が減少し、以前よりさらに入手が困難になっているとのことであった。地方の刊行物は特に入手が難しいが、Prabhu は地方にも独自の入手ルートを持っており、問い合わせれば可能な限り入手してくれるとのことであった。研究員の協力を得て、市場に流通していない政府刊行物類や NGO 関係の出版物等を中心にその場で選書を行い購入した。また、当館で継続的に収集している統計資料のリストを渡し、バックナンバーの欠号部分について

可能な限り入手するよう依頼した。

Prabhu を訪ねてみてとても印象的だったのは、店主の豊富な資料知識であった。商業ルートにのらない価格のない出版物には社会科学的に重要な資料が多いが、その価値についての理解が深く、また流通経路などを熟知しており、精力的に収集しているため、今後の資料収集活動の上で重要な書店であると感じた。郊外でややアクセスが難しい立地ではあるが、日本からの FAX や E メールを通じたオフターにも対応してくれる。

UBS Publishers' Distributors はインド国内に複数の支店を持つ大規模な書店、代理店である。米国議会図書館のニューデリーオフィスとも取引があるとのことだった。UBS では購読先切り替えの可能性を検討するために、購読中の南アジアの新聞・雑誌についてリストを渡し、次年度の年間購読料について見積りを依頼した。

実はこの出張の直前、日本 UBS の担当者が営業にきており、アジ研図書館を訪問していた。その際、翌週にデリーのオフィスを訪ねることを告げると、彼らがインドに戻る日と私がインドを去る日が同じで、すれ違いになる予定だとわかったため、他の担当者に筆者の訪問予定を伝えてもらった。ところが、オフィスを訪ねると帰国当日だったにもかかわらず、日本で会った担当者らがすでに出社しており再会を果たすことができた。日本で商談をしているときから、私の拙い英語と、初インドどころか初海外だという話から、本当にインドにいくことができるか心配されていたようで、「Nice to see you again!!」と言ったところ、「You made it!」と返された。帰国後の処理等で忙しそうだった彼らとは長く話すことはできなかったが、商談後に社内を見学できるように手配してくれ、受注や経理処理から倉庫での出納、配送までの流れについて説明を受けた。非常に迅速に処理が行われ、インターネットを介した注文の受付からほぼ 24 時間以内に発送されるようになっていた。受注から梱包作業、発送までシステマティックに連携されており、かなりの人数のスタッフがてきぱきと働いていた。社内の視察のあと、別室に用意された近刊の社会科学系の単行書を中心に、現物をみながら選書を行った。

3.2 図書館・関係機関への訪問

訪問した関係機関のうち、統計局を除きすべての機関で図書館を視察することができた。いずれも大学や研究機関など、所属機関のメンバーをサービス対象とする学術図書館・専門図書館だったため、利用資格が限定されており、外部からの利用が困難なところが多かった。しかし、尋ねてみると調査・研究のためであれば所属機関からの紹介状など公式のレターがあれば利用の許可を得ることができる場合もあった。また、インドの図書館では筆者の見る限り貸出はチケット制が一般的のようであった。利用資格のレベルにより、貸出可能冊数＝付与されるチケット枚数が異なっていた。

訪問先のライブラリアンと資料収集に関する情報交換を行ったところ、多くの図書館で選書委員会が組織されてお

り、大学教授や研究者、編集者などの有識者をメンバーとしていた。政府刊行物や国際機関の刊行物の寄託図書館となっている場合もあり、特定機関の資料の寄贈を受けていた。また、海外を含む他機関との資料交換を行っている図書館も多かった。

次に、各訪問先についての概要と調査で聞き取った内容についてまとめる。

(1) Central Secretariat Library

Central Secretariat Library (以下 CSL) は、文化省が所管する、インドおよび諸外国の公文書を所蔵する最大の図書館の 1 つである。その蔵書の背景にはインド独立以前の各州の図書館の蔵書や英領インド時代に当時の首都カルカッタ (現コルカタ) にあった Imperial Secretariat Library の蔵書を含む様々な機関の蔵書を引き継いだという経緯がある。

① Area Studies Section と ② Indian Official Government Document Section の 2 つの部門があり、フロアが分かれていた。まず、それぞれのフロアで実際に書架を見学しながら概要についての説明を受けた。

① Area Studies Section

インドだけでなく世界各地に関する地域研究資料を提供する部門であり、資料の分類・配架は、まず地域 (国別、インド国内に関しては州別) に分けたあと、その地域の中で DDC (Dewey Decimal Classification) によって配架されていた。

資料の選定は文化省の選書委員会による。選書委員会は約 40 名の有識者から構成されており、予算の範囲内で選書を行う。出版社から送られてきた本の中から選ぶ見計らい購入的な選書も行われていた。

② Indian Official Government Document Section

官報、全省庁の報告書類をはじめとする政府刊行物を対象とする部門である。CSL は中央政府の通達 (Circular) により、中央政府の刊行物を 1 部保存するよう定められた寄託図書館であるとのことだったが、それ以外にも各州等地方政府の刊行物がこのフロアに保管されていた。地方政府の刊行物に関しては寄贈されてくるものを受け入れているのみとのことで、特に積極的に収集しているわけではないようだった。しかし、一般の流通にのらない灰色文献の中でも、特に地方で刊行されたものは入手困難であり、貴重なコレクションであるといえる。中央政府の刊行物については省庁別、地方政府については州別に分けた後、DDC によって分類されている。

各フロアの見学の後、事業の概要について話を聞いた。

図書館運営以外の CSL の事業には主に以下の 3 つのプロジェクトの実施がある。

① 官報の電子化

② 書誌的レポート類の遡及変換

③ 委員会報告書 (Committee and Commission reports) の電子化

電子化に関しては、2007 年当時ですでに 2000 年分まで完了しており、数年ごとに追加して行く予定とのことだっ

た。また、当時 CSL のウェブサイト全体が技術的問題でアクセスできない状態だったが、電子化済みの資料はウェブサイトで公開予定とのことだった。ところが、その後ウェブサイトは復旧したようであるが、2011 年現在、電子化された資料はまだ掲載されていなかった。ウェブサイトには“The digital collection is available in electronic form within the premises. There is a plan to put this digital collection on the web.”との記述があった。早期公開が望まれる。

当研究所との出版物の交換についても打診したが、残念ながら出版活動は行っていないということであった。

利用資格については、a.中央政府職員、b.特別会員、c.一般会員、d.法人会員の 4 種類のメンバーシップがあり、CSL の館長が認めた学者・研究者は b.の特別会員になることができる。保証金 Rs.500 と年会費 Rs.500 (2007 年 9 月当時、Rs.1=約 3 円) の支払いが必要であるが、3 冊まで貸出可能である。また、貸出はできないが住所記載の身分証明書または所属機関からの紹介状を提示すれば、入館し閲覧および複写サービスを利用することができる。CSL には訪問した本館の他にデリー市内に 2 つの分館があり、そのうち Tulsi Sadan Library はヒンディー語をはじめとするインド諸語のコレクションを所蔵している。また、R.K.Puram Branch Library は、大卒レベルの様々な主題のテキストブックコレクションを所蔵し、R.K.Puram 地区とその周辺地域の政府官庁へのサービスを行っている。

(2)Lok Sabha Secretariat Parliament Library

インドの議会図書館である。名称には「Lok Sabha」という下院の名前がついているが、上院のメンバーにもサービスを行っている。基本的に議員の政策立案に資することを使命としているため、現在の議員および過去に議員であった人々のみが利用資格を持ち、一般公開は行っていない。しかし、所属組織からの公式の紹介状があれば研究者の利用も認めるとのことであった。

著作権法 (Copyright Act) で出版物の納本が義務づけられており、政府の報告書類だけでなく、地方の州政府の刊行物も受け入れているとのことであった。

目録はウェブ公開されており、オンラインでアクセス可能である。しかし、DELNET (Developing Library Network) と呼ばれる、総合目録の提供や加盟館同士の相互協力の支援等を行う図書館ネットワークには加盟しておらず、ILL (Inter Library Loan) が必要な場合には電話やメールでデリー市内のほかの図書館等へ問い合わせることだった。これは、議会図書館という館種に加え、自館にかなり充実した蔵書があり、ILL の必要度がそれほど高くないためだと思われる。

テロ対策のため議会の敷地内への立ち入りには何重にもチェックがあり、かなり厳重な警備体制で、入館するには敷居が高い感があったが、貴重な蔵書にアクセスするにはその利用手続きの困難さをもってしても余りあるのではないだろうか。

また、交換資料について確認を行った。当館で受け入れ

た最新の資料の刊行年が 2005 年であったため、出版状況を確認したところ、刊行が遅延しており 2005 年版が 2007 年に出た最新版であるとのことだった。

(3)Library, Indian Institute of Public Administration

Indian Institute of Public Administration (インド行政研究所。以下、IIPA) 図書館の特色としては World Bank の寄託図書館になっており、資料の寄贈を受けるとともに World Bank Information Kiosk というコーナーを一角に設けていることが挙げられる。そのコーナーには 4 台の PC が設置されており、来館者はさまざまな World Bank の出版物にアクセスすることができる。

また、新聞のクリッピングや、さまざまな索引や書誌の作成、カレント・アウェアネスサービスの実施も積極的に行っていた。

蔵書は公共政策に関するもの以外にもセンサスや政府刊行物が初期のものから揃っており、かなり充実しているように感じた。

IIPA の事業としてさまざまな研修の実施があげられるが、ファカルティメンバーや研修生のみならず、図書館自体に会員制度があり、Rs.16 を払えば 1 日単位で大学生など一般の人々も資料や施設・設備を利用することができる。専門図書館であるため、課金することにより公共図書館との差別化を図り、PC だけの利用を目的とするような人々が集まってこないようにしているとのことだった。有料とはいえ、年間単位ではなく、1 日だけの利用もできるというのは海外から訪問した場合でも利用しやすくてよいと感じた。そのほかサービスや設備等について、利用者に対するアンケートを基に改善を行っているとのことであった。

WebOPAC はないが、目録は DELNET を通して公開しているそうである。資料は ALA (米国図書館協会) の行政学に特化した分類法によって配架されている。

IIPA と当館には交換関係があり、訪問時に欠号請求を行った。訪問した時間には、出版物の販売を行なう部門がすでに閉まっていたため購入することはできなかったが、面会したライブラリアンの編纂した書誌等を寄贈してもらった。彼女は書誌を作成する際にアジ研のウェブサイトも参照しているとのことだった。

(4)Ratan Tata Library, Delhi School of Economics, University of Delhi

ラタン・タタ・ライブラリーはデリー大学の経済学部大学院に設置されており、専攻に合わせた 4 つの主題に特化した専門図書館である。基本的にデリー大学の大学院生以上しか利用できないが、身分証明書と公式の紹介状があれば外部の学生や研究者も利用できるということだった。年間 361 日間、朝 9 時から夜 7 時まで開館しており、1 日あたり 500 から 700 人の来館者が訪れるとのことである。休館日が年間 4 日間というのは日本の平均的大学図書館よりも開館日数が多いのではないだろうか。2007 年当時は改装工事中であったが、半年後には新たなスペースを確保し利用しやすくなる予定とのことだった。

館内を見学させてもらったところ、コンピューター・ルー

ムで学生が熱心に PC を利用している姿が印象に残った。1 回の利用は 1 時間に制限されており、予約して順番待ちになっているそうである。最上階は閉架書庫になっており、貴重資料が保管されていた。数点出納して見せてもらったところ、主に 1950 年代頃に出版されたイギリスの古い洋書で、補強製本されていた。インド国内ではかの図書館が所蔵していないことなどが閉架書庫にのこる基準とのことだった。

また、資料交換の確認を行った。デリー大学は複数の単科大学（カレッジ）の複合体的な性格を持つ総合大学であり、キャンパスがデリー市内に点在しているため、限られた時間では交換関係のあるこの図書館のみしか訪問できなかったが、本館や出版物の販売を行っている部門なども機会があれば訪ねてみたい。

(5) Library, Jawaharlal Nehru University

Jawaharlal Nehru University（ジャワハルラル・ネルー大学。以下 JNU）の図書館は 9 階建ての大規模な図書館であり、朝 9 時から深夜 12 時まで長時間開館していた。また、蔵書の特徴として政府刊行物や国連機関の寄託を受けていること、外国語資料のコレクションなどが挙げられる。日本語のコレクションも見せてもらったが、現在は日本語で目録を作成できるスタッフがいないため、留学生や教員の助けを借りて整理しているとのことであった。

特徴的なサービスとして、「ヘレンケラー・ユニット」と呼ばれる視覚障害のある学生のためのコーナーを設置しており、スクリーンと音声読み上げ機能のある PC を利用して資料の提供を行っていた。

JNU とは交換関係がなかったため資料交換について打診したところ、すでにアジ研の英文誌である“*Developing Economies*”を購読していたが、交換については前向きな返答を得た。また、面会したライブラリアンはアジ研の出版している単行書にも非常に関心があり、入手方法について尋ねられたため、ウェブサイトの URL と出版物販売を担当する部署のメールアドレスを伝えた。

(6) Central Statistical Organization, Ministry of Statistics and Programme Implementation, Government of India

Central Statistical Organization（インド中央統計局。以下 CSO）は担当する分野等により部門が分かれており、オフィスが点在している。このときは統計資料の欠号の入手を主な目的としていたため、資料の寄贈元である CSO の Statistical Intelligence Unit を訪問することとし、図書館の視察は行わなかった。しかし、記録にあった住所を訪問したところ 3 ヶ月前に移転したとのことで、担当者には面会することができなかった。そこで、移転先の住所を確認した後、国家予算に関する資料の欠号分の発行状況を確認し、寄贈を受けた。また、同じく統計局から寄贈を受けていた環境関係の統計資料の担当部署についても住所を聞き、後日訪問して新しく出版された資料の寄贈を受けた。交渉したところ、今後は寄贈先リストに追加し新しい統計資料が出版され次第送付してくれるとのことであった。

インドの統計はある程度ウェブサイトで入手することができるが、ページの改訂によるリンク切れやサーバダウンなど必要なときにつながらない場合がある。アクセスの保証と保存の観点からも冊子体の入手は重要であるといえる。訪問時に最新版の統計資料の発行状況を確認し寄贈してもらったが、帰国後確認したところ、その最新版についてはまだウェブサイトには掲載されていなかった。このように、ウェブサイトの更新状況により、必ずしも最新の情報が掲載されているとはいえないため、冊子体を送付してもらうことの重要性について認識を新たにした。また、在庫として保存している統計資料は古くても 2～3 年程度とのことだったので、欠号が生じたらすぐに欠号請求を行うことが重要である。古い年代の欠号についてもリストを持参していたが、版元では絶版であったため、代替手段として古書店等からの入手が考えられる。

(7) National Social Science Documentation Centre, Indian Council of Social Science Research

Indian Council of Social Science Research（インド社会科学研究所評議会。以下 ICSSR）とは以前資料交換を行っていたが、資料の送付が途絶えたため 2006 年 3 月より交換関係が解消されていた。このときの訪問では資料送付元であった ICSSR の National Social Science Documentation Centre（社会科学ドキュメンテーションセンター。以下 NASSDOC）を訪ね、再度交換の可能性を打診し、新しい図書などの出版物があれば入手することを目的としていた。担当者の話によると、交換対象資料であった雑誌は現在は出版を外部に委託しており、ICSSR には 3 部のみしか送られてこないため、残念ながら交換に回す部数がないとのことであった。出版の点数も減少しているとのことだったが、事前に当館で所蔵している ICSSR の出版物のリストを作成していったので、リストと照合しながら所蔵していない資料を寄贈してもらった。

また、NASSDOC 付属の図書館を見学し説明を受けた。この図書館の特徴的な蔵書として、学位論文のコレクションが挙げられる。インドで書かれたもの、インドに関するもの、インド人の書いたものについて収集しているとのこ



図 2 NASSDOC 図書館

とであった。また、電子資料の利用も可能であり、社会科学系のデータベースを中心に DELNET を通じて購読していた。

NASSDOC の図書館は規模は大きくはなかったが、施設・設備が新しく RFID タグを利用した自動貸出装置の設置など、非常に先進的であった。インドでの導入事例について尋ねると、2007 年当時はまだ新しい事例であり、デリーでは ICSSR のみではないかとのことであった。

4. おわりに

前半では、現地資料を重視するアジ研図書館の特徴ある資料収集方法を紹介したが、外国送金等を伴う海外書店との直接取引などは制度として行うことができない機関も多いのではないだろうか。しかし、やはり国内からだけでは入手することの難しい貴重な資料を集めるためには重要な手段であり、日本における開発途上国の資料センターを目指すアジ研図書館では、創設当初から外貨での支払いが認められていたそうである。アジ研は昨年 50 周年を迎えたが、それを記念し機関誌「アジア経済」で『アジ研の 50 年と途上国研究』と題した特別連載が組まれた。その第 10 回では『図書館と調査研究-鳥の両翼、車の両輪』というタイトルで、いかにして今日のアジ研図書館が作られたのか、創設からの歴史を振り返るインタビューが掲載されている。語り手の松本脩作氏は南アジア地域担当の有数のライブラリアンであったため、インド赴任時のエピソード等も盛り込まれている。ご関心のある方は一読いただきたい。

後半では現地調査時のエピソードを交えてインドの現地資料事情について触れた。筆者は南アジアの担当になって間もなく、現地の事情にも不慣れであったため、インドを直接訪れる機会を得たことは今後の業務や担当地域に対する知識の研鑽の上で非常に貴重な経験となった。

よく、インドに行くとはまる人と二度と行きたくないと感じる人の 2 種類にわかれると言われるが、筆者は幸いにして後者ではなかったようである。同行してくれた研究員や現地で出会った人たちのおかげでなんとか無事出張を終えることができた。日本と違うところの多いインドの図書館が珍しく、質問責めにしてしまったところ、「あなた、もう 1 日くるべきじゃないの？」と初めは皮肉混じりに言われてしまったりしたが、豊富な知識で丁寧に解説をしてくれ、最後には「国際会議か何かでまた会えるといいわね！」と言ってくれたライブラリアンや、経費は持ってきているから購入する、と言っても「大丈夫！」とイレギュラーな手続きで有料出版物を寄贈してくれた交換機関の担当者。前述の書店のマネージャーには、英語が拙かったために「ヒンディー語は話せるのか？」と聞かれ、「NO!」と答えたところ

「大丈夫だ、デリーだけなら大抵みんな英語が話せるから・・・」と励まされてしまうなど、現地の人たちの温かさを感じるとともに、言語や資料に関する知識など自分に足りないものが身にしみてわかった 5 日間であった。

インターネットや書物で現地について調べることもある程度は有効だが、思いもかけないシステムの違いや実際に訪問してみて初めてわかることも多く、やはり、現地に赴き現地事情について知ることは適切な資料収集を行うためにも重要であると感じた。また、現地における資料購入の際に感じたのは、普段のカatalog等の二次情報による選書とは異なり、タイトルや書誌情報だけでなく実際に内容を吟味することができるのは貴重な機会だということだった。しかし、時間的制約の中で効率的な選書を行うためには、あらかじめ特定のトピックに焦点を絞るなど下準備をしておくことの必要性を感じた。

インドに関して学び始めたばかりで、このような特集に寄稿するにはおこがましく、ご期待に沿うような内容になっているか心許ないが、何らかのご参考になれば幸いである。

参 考 文 献

- 1) アジア経済研究所. アジア経済研究所年報. 2010, 2009/2010 (平成 21 年度), p.86-87.
- 2) アジア経済研究所図書館. 地域別資料ガイド-南アジア-国別主要書店.
http://www.ide.go.jp/Japanese/Library/Region/South_asia/south_asia_bookstores.html [accessed 2011-10-20].
- 3) 国立情報学研究所. NACSIS-ILL 統計情報 貸借受付件数順一覧 (平成 22 年度).
<http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/archive/stats/ill/oanum/oanumal.h22.html> [accessed 2011-10-20].
- 4) Central Secretariat Library. Central Secretariat Library.
<http://www.csl.nic.in/> [accessed 2011-10-20].
- 5) Lok Sabha. Parliament Library.
http://164.100.47.132/LssNew/Library/parliament_library.html [accessed 2011-10-20].
- 6) DELNET. Developing Library Network.
<http://delnet.nic.in/> [accessed 2011-10-20].
- 7) Indian Institute of Public Administration. Library.
<http://www.iipa.org.in/library.html> [accessed 2011-10-20].
- 8) Delhi School of Economics, University of Delhi. The Ratan Tata Library. <http://crl.du.ac.in/rtl/> [accessed 2011-10-20].
- 9) Jawaharlal Nehru University. Library.
<http://www.jnu.ac.in/Library/default.htm> [accessed 2011-10-20].
- 10) ICSSR. NATIONAL SOCIAL SCIENCE DOCUMENTATION CENTRE-NASSDOC
http://www.icssr.org/doc_main.htm [accessed 2011-10-20].
- 11) 松本脩作. 第 10 回 図書館と調査研究 -- 鳥の両翼, 車の両輪. アジア経済. 2011, vol.52, no.1, p.55-76.
http://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Periodicals/Ajia/pdf/2011_01/ZAJ201101_005.pdf [accessed 2011-10-20].

Special feature: The present state of information society in India. Acquisition of Indian local materials. Kanako SAKAI (Processing Division, Library, Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization, 3-2-2 Wakaba, Mihama-ku, Chiba-shi, Chiba 261-8545 JAPAN)

Abstract: The Institute of Developing Economies (IDE) undertakes basic and comprehensive research on economic, political, and social issues in developing countries and regions. As part of the institution, the IDE library collects materials on our research fields, especially published in the local field and also written in the local language. This article introduces how to collect the Indian local materials based on our distinctive ways of resource acquisition. For instance, we purchase materials directly from local book sellers. We also exchange materials with local institutions and universities. In addition, we visit the fields and obtain materials there. In the later part, my own experience of visiting Delhi in India in 2007 for a business trip is also referred.

Keywords: India / acquisition service / bookshop / library / exchange of library materials